

る。源平盛衰記は佛ノ原とするが、諸曲も廻國雜記も佛ノ原としてゐる。今の能美郡原がそれに當る。

ホトケノハラ 佛ノ原 諸曲の名。觀世世阿彌元清の作。白山禪定を志して下つた都方の僧が、加賀國佛ノ原の草堂に一宿した時、平相國清盛の寵姫であつた佛御前の亡靈が昔を語ることを仕組む。

ホトケノハラケンケンケウ 佛ノ原金劔宮

源平盛衰記安元三年白山神興振の條に「二月五日の丙子佐羅早松社より願成寺へつかせ給ふ。云々。六日は佛ノ原金劔宮へ奉入。此明神と申は、嵯峨天皇御宇弘仁十四年に此所に奉祀て、三百五十餘年也。本地は俱利伽羅不動明王也。」とある。今能美郡原に白山社のあるもの、それであらう。

ホトケノハラジヨウ 佛ノ原城 能美郡原

に在つた。越登賀三州志故墟考に、今この遺跡を岩倉山といひ、壘跡等僅かに存する。天正三年八月織田信長がこの城を圍んで降伏せしめたことは、北陸七國志等に見える」と記す。

ホトケノマへ 佛ノ前 鹿島郡熊淵内の

小字。元祿の調書に、熊淵村の枝村佛ノ前家數四軒とある。

ホトケヤシキ 佛屋敷 石川郡東米光に在

る。加越能舊跡緒に「東米光の内佛屋敷と申所有之候。古親鸞上人、此村の百姓加右衛門と申者の方に一夜泊り有之候。其頃手取川此筋を流れ候に付、翌日加右衛門川の案内致し立廻り、川を隔て彌陀の名號被下と願候へば、荒蕪の上に布を敷、川のあなたより上人筆を點じられ候へば、文字すわり候。加右衛門荒

野の名號とて、只今は越前に有之由申傳候。」とある。

ホドタニ 程谷 珠洲郡時長の内の小字。

ホトトギスイシ 子規石 金澤城中越後屋敷の門内に在つた。人若しその邊に溺する時は狂疾を發すると傳へられて、竹園を施してあつた。三州名跡志には之を岩時島とし、富田越後在任の時、麻利支天堂の下に在つた石であるとする。

ホネシヨウガツ 骨正月 ↓ハツカシヨウ

ガツ 二十日正月。

ホリ 堀 鳳至郡大屋庄に屬する部落。能

登誌に「堀村は袖の濱へ續きて風景甚よし。靈泉寺とて禪宗の小庵あり。是又景の内なり。」とある。

ホリエカゲタダ 堀江景忠 通稱三郎・中

務丞。初め朝倉孝景に臣事して北庄城主となり、享祿四年大一揆を助けて加賀に侵入したことがある。弘治元年朝倉宗滴の義景の命によつて江沼郡に入るや景忠亦之に従うた。然るに永祿十年景忠が加賀の一揆と通じて朝倉氏に叛せんとするを諭したものであつた爲、義景は怒つて之を討たうとしたので、景忠と義兄弟の誼があつた小和田の本流寺眞孝は一乘寺城に至り、義景に謁してその寃を訴へ、且つ景忠に諭し城を開いて身を全くせしめた。是を以て三月二十日眞孝は景忠を伴ひ、能登に赴き居所を定めしめて歸つた。後天正三年加賀の一揆が織田信長の軍を越前の杉津口に沮せんとした時、景忠之と行動を共にしたが、終に降つて信長の麾下となつた。既にして信長は江沼郡に檜屋・大聖寺二城を構へしめて戸次廣正を置き、景忠と佐々權左衛門を

副たらしめた。北陸七國志によれば、後幾くもなく信長は景忠を能美郡に封じたが、その地向一揆の進退する所で賞賦を納めるを得ぬから、景忠は之を喜ばなかつた。信長之を聞き、景忠が從來去就の正しからぬを憎み、柴田勝家に命じて戮せしめたとある。

ホリガ 堀雅 通稱文平、諱は雅、字は清

雅、蘭屋と號した。父養祐坊は越中蘆波郡から金澤に移り住み、眼醫を業として世に行はれた。雅幼にして筆札を喜び、楷法は柳公權に倣ひ、行草篆隸は董其昌を慕し、遂に能く一家を爲すに至つた。文化十四年藩の老臣今枝氏之を聞いて右筆の事を掌らしめ、且つ自ら就いて學んだ。雅亦傍ら書を習ひ、南宗に則つて略その筆意を得た。晩年風月に鶴詠し修々自適して居たが、君御尙衰へず、屢特恩に與つた。安政六年十一月歿、年六十四。門人佐藤衛齋・山納蘭山亦書名を以て顯れた。

ホリカクエモン 堀尾右衛門 また角右衛

門に作る。半右衛門の弟。天正十八年關東の役に山崎闇齋に屬して出征、八王子城を攻撃して敵將金子家重を殲し、慶長五年大聖寺陣にも従ひ、元和五年四百石を賜はり、寛永十九年歿。その子覺右衛門天して家断絶した。

ホリカタハラマチ 堀片原町 ↓ラケカタ

ハラマチ 桶片原町。

ホリカツチカ 堀勝周 通稱三郎左衛門・孫

左衛門。實は興力玉川七左衛門の嫡男で、堀孫左衛門に養はれたもの。享保九年家を襲ぎ、大小將組に列し、寛保二年會所奉行、寶曆二年大小將組目、九年先手物頭、明和八年大組頭となり、安永六年十一月致仕して遊閑と稱した。勝周家に伊勢氏の作の鞍を藏し、齡百

歳に及べば藩侯に献納せんと期したが、既に衰老したので寛政十一年之を上つた。前出治脩之を悦び、和歌と道服とを興へたが、勝周は翌十二年正月十九日九十六歳を以て歿した。

ホリカハ 堀川 金澤のうち淺野川下流左

岸の汎稱で、一に堀川森ともいふ。元祿九年の地子町肝煎裁許附に、本堀川町・新堀川町・堀川川除町・堀川片原町・堀川七屋といふもの即ち是で、今は笠市町・東堀川町・西堀川町・中堀川町・堀川間町・堀川角場町・淵上町・七屋をその區域とする。而して所謂堀川は、三壺記元和六年の條に、「宮腰・大野より馬足の便りとして、淺野川下安江といふ所まで堀川を通じ、船の通ひ有ければ、則堀川町とて傾城を立、其所の有様は兵庫や須磨・明石に異ならず。」とあるもので、この文意は、大野の對岸あたりから下安江まで新川を掘鑿したものの、如くに見えるが、矢張り龜尾記にいふ通り淺野川筋を浚深擴大したものであらう。因に言ふ。出羽守高平の刀に、金澤泓河住辻村高平と切つたものがあるが、その泓河は堀川をもぢつたものかと思はれる。

ホリカハアゲバ 堀川揚場 金澤の地名。

龜尾記に「淺野川一錢橋の川下に、あげ場とて、粟ヶ崎其の外能登近郷の村々より出る材木などを引來り、爰にて上ぐるなり。又大河端村まで爰より通ふ船もあり。此の邊は古へ川を掘りひらき、材木を川より引上ぐるより、惣名を堀川と稱することゝはなりぬ。寛永の頃専らなりしと舊記に見えたり。」とある。此の揚げ場は金澤を通ずる淺野川の下流左岸の川縁一部をいふのであるが、今はこの名が